

日本映像学会 第12回ドキュメンタリードラマ研究会

1970年代 テレビドラマの 実験精神をめぐって

1970年代のテレビドラマは、前衛的な演出を特徴とする「脱ドラマ」、ホームドラマのパロディ化とメタ構造の導入、さらには久世光彦演出によるドラマとバラエティ・コントの境界を意図的に崩す作品群など、テレビというメディアそのものの形式や機能を問い直し、その表現可能性を探求する実験精神に満ちた番組が多数登場した時代として近年再評価が進んでいます。本研究会では、関連番組の2本上映し、大衆文化史とテレビドラマ史から再考する講演2本、さらにディスカッションにて1970年代のテレビドラマにおける革新性、実験性について議論を深めます。

3/8 2026 **日** 10:30
18:00

専修大学 神田校舎
7号館 3階 731教室

入場無料 予約不要・一般および学生の参加可

☆ スペシャルな2名の講師 ☆



笹山 敬輔氏



岡室 美奈子氏

撮影：Sayuki Inoue

主催 日本映像学会ドキュメンタリードラマ研究会
専修大学現代文化研究会
共催 高志プロジェクト（高志の国文学館研究助成）

プログラム 途中入退室自由。多少時間が前後する可能性有り。

第一部 上映 10時30分～

10:30 『天国の父ちゃんこんにちは』（1967年、52分）
11:30 『お荷物小荷物』（1971年、50分）

第二部 講演 13時00分～

13:00 「ホームドラマの系譜——鴨下信一と久世光彦」
笹山敬輔（演劇・大衆文化研究者）
14:45 「ザ・セブンティーズ：
政治の季節の終焉から黄金期までのテレビドラマ」
岡室美奈子（早稲田大学文学学術院教授）

第三部 ディスカッション 16時30分～

16:30 コメンテーター：藤田真文（法政大学）
司 会：丸山友美（静岡大学）

18:00 終了予定 延長の可能性あり

問い合わせ docudoraieizo@gmail.com

●専修大学 神田校舎 交通アクセス●

九段下駅（地下鉄／東西線、都営新宿線、半蔵門線）出口5より徒歩1分
神保町駅（地下鉄／都営三田線、都営新宿線、半蔵門線）出口2より徒歩3分

1970年代テレビドラマの実験精神をめぐって

1970年代のテレビドラマは、テレビマンユニオンの創設（1970年）を契機とする独立系プロダクションの台頭や、前衛的な演出を特徴とする「脱ドラマ」『お荷物小荷物』シリーズ（脚本：佐々木守、1970-72年）、ホームドラマのパロディ化とメタ構造の導入、さらには久世光彦演出によるドラマとバラエティ・コントの境界を意図的に崩す作品群など、テレビというメディアそのものの形式や機能を問い直し、その表現可能性を探究する実験精神に満ちた番組が多数登場した時代として近年再評価が進んでいます。

本研究会では、関連番組の上映（2作品）、および、1970年代のテレビドラマの状況を大衆文化史、テレビドラマ史から再考する講演2本、さらに、『テレビドラマ研究の教科書——ジェンダー・家族・都市』（青弓社、2024年）の著者、藤田真文氏（法政大学社会学部教授）を交えたディスカッション・パートを加えた計3部構成にて、1970年代テレビドラマの実験精神の多様なあり方を検討します。

これらのプログラムを通じて、即興性やドキュメンタリー的要素の導入、パロディ・メタ構造による虚構性の強調といった当時の革新的技法が、1970年代という政治・文化・社会の転換期における時代思潮をどのように映し出していたのか、また、同時性・大衆性・日常性などをはじめとするテレビメディア固有の特性をいかに拡張・変容させたのかを探ることにより、メディア文化史におけるテレビドラマの位置づけをあらためて展望します。

笹山 敬輔

筑波大学大学院博士課程修了（博士〔文学〕）。著書に、『昭和芸人七人の最期』（文春文庫、2016年）、『演技術の日本近代』（森話社、2012年）、『興行師列伝愛と裏切りの近代芸能史』（新潮新書、2020年）、『ドリフターズとその時代』（文春新書、2022年）、『笑いの正解 東京喜劇と伊東四朗』（文藝春秋、2024年）、『ケロリン百年物語』（監修、文藝春秋、2025年）など。2026年から芸能や娯楽などの大衆文化研究の促進を目的とした「ケロリンBOOKS」を創刊。

上映番組

東芝日曜劇場

『天国の父ちゃんこんにちは その4』

1967年10月15日 21:30～22:30、TBS 50分

演出：鴨下信一、プロデューサー：石井ふく子

脚本：小松君郎、原作：日比野都

出演：森光子、二木てるみ、松山省二ほか

概要：大阪で下着の行商をやっていた日比野都による同名手記を脚色。

あらすじ：都（森光子）は夫の死後、どぶいけから仕入れた下着類を行商して、娘・律子（二木てるみ）と息子・健（松山省二）を育てている。ユーモアたっぷりに自ら「日本一のパンツ屋」と称し、浪花女のご根性で辛いことも明るく笑い飛ばして毎日を精一杯おこなっている。律子は恋人の長次、健は部活動の美人マネージャーに夢中で、都は少し寂しい。都は偶然知り合った経済学者・大森作太郎に個人教授をしてもらえることになり、喜び勇んで大森家を訪ねる。

岡室 美奈子

早大演劇博物館前館長。文学博士。専門はテレビドラマ論、現代演劇論、ベケット論。放送番組センター理事などの放送関係の委員・役員や、ギャラクシー賞などテレビ関係の賞の審査員、文化審議会文化経済部会委員などを務める。著書に『テレビドラマは時代を映す』（ハヤカワ新書、2024年）共編著に『大テレビドラマ博覧会』、『六〇年代演劇再考』など。訳書に『新訳ベケット戯曲全集1 ゴドーを待ちながら／エンドゲーム』など。

『お荷物小荷物』（18・19、最終回）

1971年02月13日 22:00～22:56、ABCテレビ／TBS系列 52分

作：佐々木守、プロデューサー：山内久司、

演出：井尻益次郎、西村大介

出演：中山千夏、河原崎長一郎、浜田光夫、林隆三ほか

概要：「脱・ドラマ」として知られる伝説のテレビドラマ。本作は最終回以外の映像は現存しない。1970年10月17日～全18回。第15回ギャラクシー賞選奨受賞作。

あらすじ：引越センター・滝沢運送店を営む滝沢家は、祖父・忠太郎（志村喬）を筆頭に男尊女卑をモットーとする男だらけの家族である。そこへ住み込みのお手伝いとして、「田の中菊」こと今帰仁菊代（中山千夏）が沖縄からやって来る。菊の目的は滝沢家に乗っ取り、亡き姉の子を滝沢家の長男・仁（河原崎長一郎）に認知させ、跡とり息子にすることであった。やがて菊は滝沢家の男たちを手玉にとり、すっかり皆を懐柔させてしまう。そして菊は祖父・忠太郎の妻になる。菊のことが好きな五人兄弟はその結婚をめぐり、武道の達人である祖父と対決する。シュールな演出、ブラック・ユーモア満載の番組後半では、兄弟たちのプロポーズに対し、ついに菊が本当に一番好きな人を告白する。